

張廷済の文房清玩一斑

――文房具と書の融合――

川 合 尚 子

〔抄 録〕

文房清玩は、文人の間で発展した、優雅で心豊かに過ごすための空間である書斎造りの文化で、中国書道文化を研究する上で重要な分野といえる。書斎は、書画詩文の創作や文物鑑賞、学問研究に励む場所である。書斎が清く美しく整っていると、その中にいる人は心躍り、美しく豊かになり、文化活動も捗ることだろう。張廷済（一七六八―一八四八）もその文化に親しんだ一人で、彼の文房清玩を知る最たる史料としては、張廷済著『清儀閣所蔵古器物文』第十冊である。この著は、筆と紙については記されていないが、彼が収蔵していた文房具の硯の型や銘文、竹の臂閣、筆

筒などに刻された文字を採拓し、その余白に跋を書いている。また、彼の愛蔵していた「円歛石硯」の背には董其昌の書を刻したり、臂閣には、王羲之の書を刻したり、文房具を優美な書で飾り、そのもの自体一つの世界を作り出している様で、まさに、文房具と書の融合を醸し出していると言っても良い。このような、張廷済の独特な文房清玩の一斑を窺うことにしたい。

キーワード 張廷済 文房清玩 書道文化 書斎 清儀閣所蔵古

器物文

はじめに

文房清玩は、文人の間で発展した、優雅で心豊かに過ごすための空間である書斎造りの文化で、中国書道文化を研究する上で重要な分野といえる。主に上質で美しい装飾や形、由緒ある硯、墨、紙、筆の筆

記具をはじめ、机、椅子、書架、花瓶、茶器、食器、香炉などの家具類に至るまでの収集、鑑賞、或いは好みのものを職人に作らせ、美しい文具や家具で書斎を彩る。書斎とは、書画詩文の創作や文物鑑賞または学問研究に励む場所である。その書斎が清く美しく整っていると、その中では心躍り、美しく豊かになっていき、文化活動も捗る

ことだろう。張廷済もその文化に親しんだ一人で、彼の文房清玩を知る最たる史料としては、張廷済著『清儀閣所藏古器物文』第十冊である。この著書には、筆と紙については記されていないが、彼が収蔵していた文房具の硯の型や銘文、硯の檀蓋の刻字、墨、墨匣の刻字、机や椅子の刻字、竹の臂閣、筆筒の刻字など採拓できるものを拓本にとり、その余白に跋を書いている。その内容は、それぞれの文具の出所、歴史、材質、購入金額、誰から買い入れ、或いは貰い受けたものかなどを詳細に記している。彼の文房具にもその名称題や由来を刻した銘文もあるが、中でも、「円歛石硯」の背には董其昌の書を刻したり、臂閣には、王羲之の書を刻したり、文房具を優美な書で飾り、そのも自体一つの世界を作り出している様で、まさに、文房具と書の融合を醸し出していると言っても良い。このような、張廷済独特の文房清玩の一斑を窺うことにしたい。

一、張廷済の書斎を彩る文房具

ここに収録されているのは、硯、硯箱、墨、墨箱、文木箱、机、紫檀椅子、竹臂閣、紫檀箱、竹筆筒、太平水龍刻字（貯蔵庫）と多岐に及び、筆や紙など書物には載せられないものは確認できていないが、これらを見ると、学者の気風を感じさせる優美な書斎であつたであろう。まずは、この冊中から主なものを取り上げ、どんな内容なのかを見ていこう。

○洮河八駿硯

〈原文〉

得宋文繡院洮河石硯、不数月、又以銀一餅得此於吳興書賈。房師邢侗山先生家階州、居近鞏昌。為余言、曾渡臨洮、未獲片石、因奉此為先生六十寿。蓋嘉慶二十二年戊寅冬日事也。道光四年甲申二月五日、叔未張廷済。

〈訓読〉

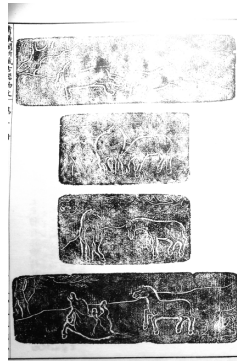
宋文繡院洮河石硯を得てより、数月ならずして又銀一餅を以て此を吳興の書賈に得たり。房師邢侗山先生は階州家し、居鞏昌に近し。余の為に言ふ、曾て臨洮に渡るも、未だ片石をも獲ず、因て此を奉り先生六十寿の為にす。蓋し嘉慶二十二年戊寅冬日の事なり。道光四年甲申二月五日、叔未張廷済。

〈現代語訳〉

宋文繡院洮河石硯を得てより、数ヶ月も経たないうちに、また銀一餅を以てこれを吳興の書店で入手した。房師邢侗山先生階州に家を構えておられ、お住まいが、鞏昌（現在の甘肅省隴西県）に近いので、私に、「かつて、臨洮（現在の甘肅省滿州）へ行きましたが、ただ一方の洮河石も入手できませんでした。ですから、これを先生（張廷済）の六十の寿（還暦）の記念として差し上げます。」といつて下さった。思うにそれは、嘉慶二十二年戊寅冬日の事だった。道光四年（一八二四）甲申二月五日 叔未張廷済。

〈補注〉

洮河石硯は、中国四大名硯の一つで、中国西部甘肅省の甘南チベット族自治州の卓尼県が主な生産地で、材料となる天然石が、洮河で採



れる緑色の石なので「洮河緑石」とも言われている。

邢澍（一七五九—一八一九）字は雨民、または自軒。号は隄山、

甘肅階州の人。乾隆五十五年（一七九〇）の進士。張廷済の「房

師」すなわち科挙を受験した時の試験官であり、同じく金石に親し

んだ。著書には『監止亭翰墨叢録』、『長興県志』等がある。張廷

済が宋の文繡院（衣服などに刺

繡を施すことを掌る）旧蔵の洮河硯を入手してから数ヶ月も経たないうちに、「房師」の邢澍から還暦を記念して贈られた洮河石は、墨縁によつて築かれた友情の一こまを見ることができ。張廷済は、友人や先生から名品を入手すると感謝の気持ちを含めてそのことを題跋に記している。これも、張廷済の高尚な趣味の一つだった。

○彭文勤貢墨匣刻字

〈原文〉

彭文勤相国貢墨一匣九枚、每墨用高宗純皇帝御製詠墨詩句。匣面四字亦系相国敬書者。重八斤。

道光丙戌五月、硇石将星華所贈。嘉興張廷済敬藏。

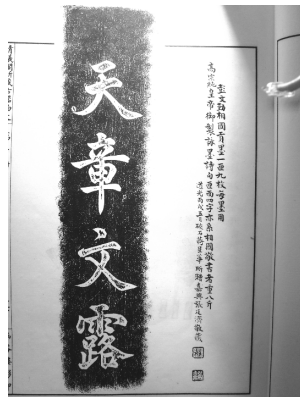
〈訓読〉

彭文勤相国貢墨一匣九枚、墨毎に高宗純皇帝御製の詠墨詩の句を用ふ。匣面の四字も亦相国の敬書せし者に系る。重さは八斤なり。道光丙戌五月、硇石の将星華の贈る所なり。嘉興の張廷済敬んで蔵す。

〈現代語訳〉

彭文勤相国の貢墨一匣九枚、一枚の墨ごとに高宗純皇帝御製の詠墨の詩句を用いている。匣面の四字も相国の敬書したものである。重さは八斤（約4kg）である。

道光丙戌（一八二六）五月、硇石の将星華から贈られた物である。嘉興の張廷済敬んで蔵す。



〈補注〉

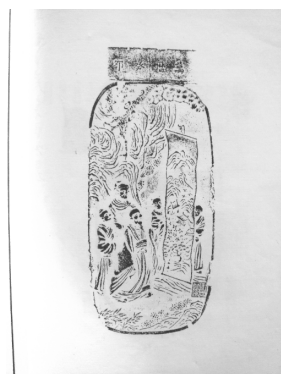
清の彭元瑞が皇帝に献上した墨、一匣九枚で、墨ごとに高宗純皇帝御製の詠墨の詩句を用いている。匣の面に刻された四字「天章文露」も彭元瑞が敬書したものである。

のである。将星華から張廷済に贈られたものという。皇帝の持ち物であった文房具をも手に入れられる彼の交友関係の豊かさが窺え、人と人との繋がりを重んじる人物で、この交友こそが、彼の学問や金石趣味、文房清玩の要であったといえるだろう。

○明程君房製硯水墨 松窓補題

これは、跋文が無く、墨の拓の余白に褚德彝（松窓は字）が題を記している。明の程君房は、有名な墨制作者として知られている。程君房（一五七三—一六二〇）名は大約。字は幼博。号は筱野。別の字は君房。若い頃より制墨を好んだ。彼の制作した墨品は、前人の長所を研究し、良質のものを作る。君房は、自ら墨品五百を摹刻して、『墨苑』一冊を著した。この著は、墨の鑑別の主要な手鑑となっている。

『清儀閣所藏古器物文』には、しばしばこの著を分類・編集し直した褚德彝が、特に題や跋が書かれていないものに、題や跋を書き添え、という文物なのかを説明している。



○高麗国翰林風月墨

〈原文〉

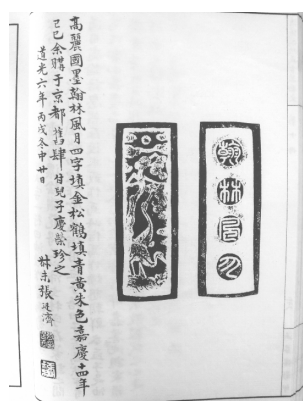
高麗国墨、翰林風月四字。填金松鶴、填青黄朱色。嘉慶十四年己巳、余購于京都旧肆。付兒子慶栄珍之。道光六年丙戌冬中廿日、叔未張廷済。

〈訓読〉

高麗国の墨、翰林風月の四字あり。松鶴を填^{てん}金し、青黄朱色を填む。嘉慶十四年己巳、余京都の旧肆に購たり。兒子慶栄に付す、之れを珍とせよ。道光六年丙戌冬中二十日、叔未張廷済。

〈現代語訳〉

高麗国の墨で、翰林風月の四字がある。金の松鶴を金泥で填め、青黄朱色をも填めている。嘉慶十四年（一七九〇）己巳、私が京都（北京）の旧肆で購入した。息子の慶栄に与えるので、大切にせよ。道光六年（一八四〇）丙戌冬中二十日、叔未張廷済。



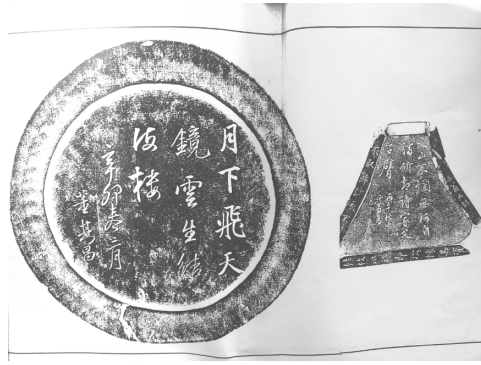
〈補注〉

これは、高麗墨で、表に「翰林風月」の四字があり、裏に金の松鶴や青黄朱色が入れられている。北京の旧肆で購入し、後、息子の慶栄に与えたと書いている。張廷済は、旅先で珍しい文物を見つけると必ず購入したり、貰い受けたりする。地元の文物の収集に止まらず各地における文物収集も怠らず、研究していくのが彼の収集方法といえる。

二、張廷済がデザインした文房具

さて、張廷済の文房清玩について話をすすめていきたい。彼の収集した文房具の中には、彼自身が、その文房具に似合う名跡を選んで刻

し愛玩するという、他では、あまり見かけない彼独自の文房清玩の世界がある。これは、文房具を新たにデザインして、オリジナルの文房具を作り出したと言えるのではないか。この冊では、もともと文房具に模様や書を刻しているものではなく、後から硯等の文房具に王羲之、董其昌などの書を刻したものが収録されている。その中でも主要なものを見ていこう。



○円歛硯（背刻董書）

〈原文〉

家蔵有董思翁絹本雜体書冊。嘉慶十五年庚午夏五、属陸友雲中粧此勒於歛石硯背。思翁生於嘉靖三十四年乙卯、萬歷十七年己丑、選庶常。十八年辛卯、思翁年三十七。道光四年甲申四月十二日、叔未張廷濟。

〈訓読〉

家蔵に董思翁の絹本雜体書冊有り。嘉慶十五年庚午夏五、陸友雲中に属して此れを粧し、歛石硯の背に勒せり。思翁は嘉靖三十四年乙卯に生まれ、萬歷十七年己丑、庶常に選ばれる。十八年辛卯、思翁年三十七なり。道光四年甲申四月十二日、叔未張廷濟

〈現代語訳〉

家蔵に、董其昌の絹本雜体書冊がある。嘉慶十五年（一八一〇）庚午

夏五月、陸雲中に頼んでこれを副勒して歛石硯の背に刻んでもらった。思翁（董其昌）は嘉靖三十四年（一五五五）乙卯に生まれ、萬歷十七年（一五八九）己丑に庶常（翰林院院庶吉士）に選ばれた。十八年（二五九〇）辛卯は思翁三十七歳である。道光四年（一八二四）甲申四月十二日、叔未張廷濟。

○水精馬

〈原文〉

余藏有水精馬、以文木匱之、此刻於匱。嘉興張廷濟。

〈水精馬を収めた匣に次の文を刻す〉

馬 錢唐黃小松司馬贈本。道光丁亥秋日粧勒。

〈同〉

至嵩山、住山中十日、從中嶽廟□（一字不明）東、石人冠頂上拓得一分書馬字、真是漢隸。武虛谷云、行千里、得此一字、此是千里馬也。

易 黃（白文印）

〈刻字〉

中嶽廟石人冠頂字。

〈題字〉

嘉慶元年九月、遊嵩山訪得。小松 黃易之印（白文印）

〈訓読〉

余の蔵に水精馬有り、文木を以て之を匱にせる、此は匱に刻せるなり。嘉興張廷濟。

錢唐の黄小松司馬の贈本なり。道光丁亥秋日、粧勒す。

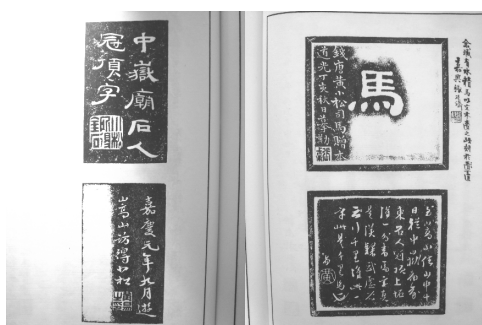
嵩山に至り、山中十日に住ること、中嶽廟□東の石人冠頂上従り、一分書の馬字を拓し得たり、真に是れ漢隸なり。武虚谷云ふ、「千里を行きて、此の一字を得、此は是れ千里の馬也。」と。

易〔黄〕（白文印）

〈現代語訳〉

私の蔵に水精（水晶）の盤の馬がある。文木の匱に入れられており、此は、匱に刻したものである。嘉興の張廷済。

錢唐の黄小松司馬の贈本である。道光丁亥（一八二七）秋日粧勒する。



嵩山に至り山中に十日間とどまり、中嶽廟□の東の石人冠頂上から八分書で書かれた馬字を採拓した。真にこれは漢隸である。武虚谷が言うには、「千里を行って、この一字を得たのは、これこそ千里の名馬である。」と。易〔黄〕

〈補注〉

これは、黄易から贈られた「馬」の字とそれにまつわる黄易の書いた跋文を文木の匱の四面に刻したものだ。黄易

（二七四四—一八〇二）字は大易、小松。号は秋影庵主、小蓬萊閣。浙江仁和人。嘉慶道光期の金石学者で篆刻、書、画に工みであった。西泠四家にも加えられている。細かい匱のサイズであるが、「馬」の字や黄易の書をうまく調和させ刻している。また、黄易とも交友関係があったことが見て取れる。武虚谷は清の武億、虚谷はその字。考証に長じ、金石にも精しかった。

○竹臂閣 王羲之の書一

〈原文〉

乾隆五十八年癸丑、偕浄浦畢菟園明経星海、以大錢二千、從蘇君鳴盛、買得王虚舟吏部為中使咸熙春臨右軍雜帖朝鮮紙本一冊、此其所臨第一帖也。嘉慶十年乙丑、粧勒於竹臂閣上。右軍此跡、陳馮氏原刻俱登天府。吏部此臨、得鳳翥鸞翔氣象、自是国朝鉅手。道光四年甲申二月三日、書于八瓚精舍。

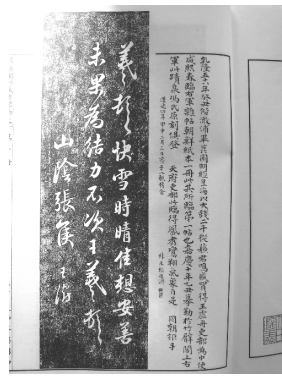
〈訓読〉

乾隆五十八年癸丑、浄浦畢菟園明経星海と偕に、大錢二千を以て、蘇君鳴盛従り、王虚舟吏部の中使咸熙春の為に臨せる右軍雜帖朝鮮紙本一冊を買ひ得たり。此れは臨する所の第一帖なり。嘉慶十年乙丑、竹臂閣上に粧勒せり。右軍の此跡、陳馮氏の原刻は俱に天府に登る。吏部の此の臨は、鳳翥鸞翔の氣象を得、自らは是れ国朝の鉅手なり。道光四年甲申二月三日、八瓚精舍に書す。

〈現代語訳〉

乾隆五十八年（一七九三）癸丑、浄浦の畢菟園明経星海とともに、大

錢二千で、蘇鳴盛から、王虚舟吏部（王澐）が中使の咸熙春のために臨して、右軍雜帖朝鮮紙本一冊を購入した。これは、王澐が臨した第一帖である。嘉慶十年（一八〇五）乙丑、竹臂閣上に粧勒した。右軍のこの筆跡及び馮氏の原刻はともに吏部（王澐）のこの臨は、鳳翥鸞翔の氣象を得ており、もとよりこれは国朝の鉅手（大家）である。道光四年（一八二四）甲申二月三日、八瓊精舎に書す。



〈補注〉

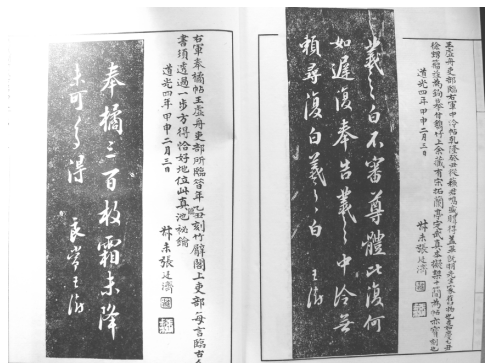
これは、竹臂閣という書道用具で、文字を書く時、紙面の墨が乾かないうちは腕が汚れたり、紙面が汚れたりすることがある。それを防ぐために腕の下に敷くいわゆる

腕枕のことである。この臂閣の表面著名な書家王澐の臨した王羲之の「快雪時晴帖」を据り込んだもの。臂閣の面積と余白と書のバランスが絶妙で、書が立体になって抜け出さそうに見える。日々見たり使ったりするだけで自らも能書になれそうな品である。「鳳翥鸞翔」のは王羲之の書を称せられた語で、『晋書』卷八十の王羲之伝の賛に見える。

○竹臂閣 王羲之の書二

〈原文〉

王虚舟吏部臨右軍中冷帖、乾隆癸丑、從蘇君鳴盛購得。盖畢既明先生



家旧蔵物也。嘉慶乙丑、徐甥籀莊為鉤粧付鐫竹上。余蔵有宋拓蘭亭定武真本擬契十簡為帖、亦宝刻也。道光四年甲申二月三日。叔未張廷濟。

〈訓読〉

王虚舟吏部の臨する右軍中冷帖、乾隆癸丑、蘇君鳴盛從り購ひ得たり。盖し畢既明先生の家の旧蔵物なり。嘉慶乙丑、徐甥籀莊為めに鉤粧し鐫竹上に鐫付したり。余の蔵には、宋拓蘭亭定武真本を十簡に擬契して帖と為せる有り、亦宝刻なり。道光四年甲申二月三日。叔未張廷濟。

〈現代語訳〉

王虚舟吏部（王澐）臨せる右軍中冷帖、乾隆癸丑（一七九三）、蘇君鳴盛から購入した。思うに、畢既明先生家の旧蔵物である。嘉慶乙丑（一八〇五）、甥の徐籀莊が、鉤粧して竹上に鐫り付けた。余の蔵書には、宋拓蘭亭定武真本を十簡に粧勒して帖にしたものがあり、これまた、刻宝となるものである。道光四年（一八二四）甲申二月三日。叔未張廷濟。

〈補注〉

これもまた、前と同じで、蘇氏から購入した王羲之の帖を甥の徐同柏に命じて、竹臂閣に彫りこませたものである。

○竹臂閣 王羲之の書三

〈原文〉

右軍奉橘帖、王虚舟吏部所臨。昔年乙丑刻竹臂閣上。吏部每言、臨古人書、須透過一步、方得恰好地位。此真臨池秘鑰。道光四年甲申二月三日、叔未張廷済。

〈訓読〉

右軍奉橘帖、王虚舟吏部の臨する所。昔年乙丑竹臂閣上に刻したり。吏部毎に言へらく、古人の書を臨するには、須く一步を透過すべく、方めて恰好の地位を得ると。此れ真に臨池の秘鑰なり。道光四甲申二月三日。叔未張廷済。

〈現代語訳〉

右軍奉橘帖、王虚舟吏部（王澍）が臨書したもの。昔年乙丑（一八〇五）竹臂閣上に刻した。吏部はいつも、「古人の書を臨するには、須らく一步をつきつめなければならず、そうすることで恰好の所をえることができる。」といっていた。これは、まことに臨池の秘鑰（書における秘密の鍵）である。道光四（一八二四）甲申二月三日、叔未張廷済。

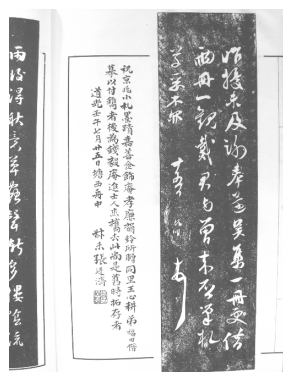
〈補注〉

これは、王澍が臨書した王羲之の奉橘帖を竹臂閣に刻入したものを拓本にとり、その余白に書かれた跋である。王澍の書論『竹雲題跋』卷三「顔魯公中興頌」中の一文、「臨摹古人、須令透一步翻一局、乃得恰合」を引用してこの臨書の説明に当てている。

○竹臂閣 祝允明の書

〈原文〉

祝京兆小札墨跡、嘉善金飾庵孝廉韻鈴所贈、同里王心耕弟福田借粧以付鐫者。後為錢穀庵進士人杰攜去。此尚是旧時拓存者。道光壬午七月二十五日、塘西舟中、叔未張



〈訓読〉

祝京兆の小札墨跡、嘉善の金飾庵孝廉韻鈴の贈る所にして、同里の王心耕弟福田の借粧して、以鐫付せる者なり。後、錢穀庵進士人杰攜え去れり。此れ尚是れ旧時の拓の存せる者なり。道光壬午（一八二二）七月二十五日、塘西舟中、叔未張廷済。

〈現代語訳〉

祝京兆の小品墨跡、嘉善（浙江省）の金韻鈴から贈られたもので、同里の王心耕弟福田が借れて、粧刻したものである。その後、錢人杰が持ち帰ってしまった。これは、昔採った拓本が残っていたものである。道光壬午（一八二二）七月二十五日、塘西舟中にて、叔未張廷済。

〈補注〉

祝京兆は、祝允明（一四六〇—一五二六）。字は希哲。生まれつき右手の指が六本あり、枝山、又は枝山老樵、枝脂生、枝指山人などと号した。長洲（江蘇省呉県）の人。唐寅、文徵明、徐禎卿等とともに蘇州で活躍した「呉中四才子」の一人。祝允明の尺牘を竹の臂閣に粧

刻したもので、本体は、銭氏に持ち帰られたため、張廷済の手元にはなく、昔採った拓本が残っていたので、その余白にこの跋を書いたのである。

このように、張廷済がデザインした文房具は、その材質にふさわしく文字が刻されており、その優美さは、もはや芸術作品といってよい。由緒ある文房具、家具とともに、自分で作り上げた文房具で書齋を彩り、学問や芸術に勤しみ、その空間と時間を楽しむこと、自分だけの文房具を作り、毎日を心楽しく豊かに暮らすことが、張廷済の文房清玩の真髄であっただろう。

おわりに

彼が収蔵していた文房具の硯の型や銘文、竹の臂閣などの刻字を見てみると、彼の文房具は優美な書作品で彩られ、文房具の使用価値が一気に上がり、それを使う人の心をも楽しくさせ、優雅で高尚な世界へと誘ってくれる。文房具と書の融合を醸し出しているといつてよい。このような張廷済の文房清玩は、後の人々にも多大な影響を与え続け、文房清玩の文化は発展していくことになる。今後は、張廷済によって高められた文房具と書の融合を念頭において、書がいかに文房具にデザインされていたか、どのように影響されていたかを明らかにしたい。

参考文献

- 《根本資料》
『清儀閣所蔵古器物文』十冊 清・張廷済撰
民国十四年（一九二五）上海商務印書館 桐郷徐氏愛日館藏本景印
- 《伝記資料》
『清代画史増編』三十七卷・補録一卷 盛薰輯
民国十六年（一九二七）有正書局
- 『清画家詩史』二十卷 李潛之輯
民国十九年（一九三〇）寧津李氏刊本
- 『甌鉢羅室書画過目考』四卷附一卷 清・李玉榮撰
光緒二十三年（一八九七）男元振刊本
民国十七年（一九二八）上海中華書局
- 『新編金石学録』 松丸道雄編
昭和五十一年（一九七六）九月発行 汲古書院
- 《その他資料》
『清儀閣雜詠』張廷済編 一八三九年 清儀閣刻
『文房清玩』全五冊 中田勇次郎著 一九六一年から一九七六年 二玄社
- （かわい なおこ 文学研究科国文学専攻博士後期課程）
（指導教員・長尾 秀則 教授）
二〇一一年九月三十日受理